

13  
2055  
卷

序



その御座るに其名も...  
二馬雙の歌も筆に拍子...  
位付の大極と色の思ひ...  
作者まゝの中ふ高野の...  
を番を鼓二中敷と...  
の二三のけふあや...  
さるば僕が祖と...  
作者を救百部の著述...  
中ふ彼者評判...  
家に傳へて今も僕...  
毎に撰ぶる...

式亭三郎の流傳に表を  
あつては物の心算も癖を穿て  
述ゆいしを流傳の因もあらは  
席きしめあふくも疑なきは  
物とのと流傳は傳ふはあら  
席きしめあふくも疑なきは  
あらはれしはけしむるの多  
清をおくもきしむるもあら

末の  
八月  
八文舎止院  
自笑



●世の中て一すあひやまざる

は客者判記初編三冊巻首より之尾まで  
文体を組んで文字を自ら流傳の口調は儼然と  
あつてはしむるも流傳の口調は儼然と  
む人物の癖の心算も癖を穿て  
また流傳の心算も癖を穿て  
あらはれしはけしむるの多  
清をおくもきしむるもあら  
先づそのためはよまざる

江戸あは市隠

式亭三馬教曰













平々上七





つゝはアサ州の梳の化授ひ。今さら殺してなれど  
指よりたれ身を縮め、つゝもあやもゆるてた我の  
代してあつて種も辱められ、面目も今  
つゝはアサ州の梳の化授ひ。今さら殺してなれど  
指よりたれ身を縮め、つゝもあやもゆるてた我の  
代してあつて種も辱められ、面目も今  
つゝはアサ州の梳の化授ひ。今さら殺してなれど  
指よりたれ身を縮め、つゝもあやもゆるてた我の  
代してあつて種も辱められ、面目も今

あつて我の母は、てんを物せよとのけいれん物なる  
髪をさかす彼を女ふこれとせよ馬よりなり。  
我の母のさかすから縛れも巧惜。さす  
も命賜りたるは、此の梳の化授ひさのゆいで  
んせんごき上る。合羽と鏡をたれ、細着とさる  
梳の皮をその綿代の方遠くさかすれんごき  
ては大笑とありける。さかす後さかすることさす未  
世のことと讀ふ梳を馬に乗せんとけ耐よりぞ  
啼りる。梳も二人の髪をたれん物をらふひひてい  
なり。善我はけし月ねを好きていつりよまれぬ  
身振声さびりて、一瓢白兔三樂は、数ひは  
芝居を各るの、松江七老を嬉して、四十八  
番の三芝居、人殺のゆいせ、さかす人、さかす  
さかす、さかす、さかす、さかす、さかす、さかす、  
終切のさかす、深きれ、我をふるひ、さかす、さかす





後世に其の芳名を知らしむるまでおたからぬ後者  
 も、我々も其の如きものありては、後者の評  
 記をくわくし、其の著明なるをからく  
 遠くわたるものには、明らけし巻を授け  
 寄附洋前記のなを授けしこと、もつたの  
 後、海邊を踏み、我々もつて、頃茶屋  
 ののりつて、若くは、おたからぬ  
 直中、茶番の、おたからぬ、おたからぬ  
 直中、茶番の、おたからぬ、おたからぬ  
 直中、茶番の、おたからぬ、おたからぬ  
 直中、茶番の、おたからぬ、おたからぬ

文政六 作者  
 ひ下の 二馬  
 春再板

寄者評判記  
 人物志

文政六の  
 評判  
 大坂の  
 評判  
 大坂の  
 評判



大坂の人情

呼ばれし人々

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

其名の字と西落と通る者

江戸の人情

三巻 三巻 三巻

員負 八百八所 町風呂

江戸ッ子 流行

無類 大坂人 一流

京極人 風流

立役之部

極上上吉 員負定連 奥雄

極上上吉 志むの好 軌か

芝居と西落の

真上吉 見功者 見功者 凋練

上上吉 芝居通 芝居通 穿鑿

上上吉 沢 沢 通情

上上吉 役者氣取 役者氣取 好男

上上吉 後敷媚 後敷媚 好色

上上吉 産具負 産具負 偏頗

上上吉 才振好 才振好 格別

上上吉 聲色好 聲色好 格外

上上 的んを郎 的んを郎 癡呆

上上 行通者 行通者 振急

大上上吉 算算敷の箱 算算敷の箱 廉直

親仁方之部

功上上吉 古實者 古實者 記憶

上上吉 昔具負 昔具負 智功

實悪之部

上上吉 てんおろ てんおろ 強傑

おの...  
おの...  
おの...

上上書

後者好

時花

良首ハ、うららうの、武舟

上上士

酒

好

振振

おまへんが、ちやうど、まじり、まじり

上上士

料理好

好

風雅

まじり、まじり、その、その、吉、吉

上上吉

樂至書

物好

す、す、す、す、す、す、す、す

▲敵役之部

至上上吉

喧嘩好

殺風景

又、又、又、又、又、又、又、又

上上吉

けろくち

失禮

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ

上上吉

堅意地

非礼

ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら

上上

さつじん

狼藉

よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ、よ

▲道外形之部

上上士

居眠好

不風雅

狂、狂、狂、狂、狂、狂、狂、狂

上上士

きんごう

假在行

ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち

上上士

新五左

律儀

大、大、大、大、大、大、大、大

上上

高き

多辨

げ、げ、げ、げ、げ、げ、げ、げ

上上

田舎人

篤実

ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら、ら

上けら助

質素上ひん

困窮

つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ



▲若女形之部

極上上吉

お宿さぐり

浮虚

宿から宿はまひお氣をいひまじり

上上吉

山新造

個連

まひつら茶をいへやとてはかせ

上上吉

お嬢

柔和

芝居とてていそとびつら我ら

上上吉

むさめ

温良

いそね先ふ後あまのいそとて

上上吉

おのこさん

若樂

子どもゆきおし物をも綱車

上上吉

かア左衛門

俠氣

芝居のちんぞ命めとて女をけ六

上上

下女

菱中

朝飯をまふひまもかかせたて小町

上

田舎の井蛙

上山中

無我

▲花車形之部

上上吉

岩後どめ

威權

いそとていそとていそとていそとて

上上士

姑老

淫曲

さかかゝ像あやまればとて筆書は筆書

上上士

親

老実

おのつらよりとてとて世活は世活のいそと

上

かゝさん

優長

上

やとひ

怪食

▲名尻形之部

上上

出まの

質朴

おまの芝居をうれが内か花のそん

上上

市宿

飲樂

あまの宿よりふ龍くは兼る城のそん

上

地女の子

難儀

上

おのこさん

迷惑

子どもだまに買あてかちとていそとて

惣巻軸

極上上吉

芝居あつば

無心

世の中は人であらうと天人羽衣

極上上吉

聲色連中

千秋万歳三芝居大無忌昌

めでとく計

當辛未春新版の比指録

式亭三馬作

忠臣藏偏癡氣論

全一冊

初段より十二段目までの人物とあひそぐ  
真像を画きその行ひの善悪を堅定  
ある不利屋をばらばらけけ評論おしと  
く。さへならぬよみ奉るり

惣巻頭

江戸っ子 流行

三幅對 大坂人 一流

京都人 風流

及名曰東西へ世に初らる者皆評判死の發端と

の津に人氣の差出するは急務善頭智仁男は

三徳の表と三幅對のしつとる様ちのちの

かみぐりのちのちの Shammy イヤわさく コライ及

のさしきまがんでいひかうんちやア後うらちら

ゆのちのちの東ぶぶぶぶ上り方れ才あちと俱一に

されちやアおささるいしちのちのちのちのちのち

をりと別おはやなとでぬのと女の原を女様其

馬鹿のちのちのちの はる通者 コレサく長

後とけしちのちのちのちのちのちのちのちのち

江戸っ子やね流石お陰れと男はさへハテ流石と

江戸をさがす真の江戸子と云ふは化國人の想く  
 も恥らしき事なむと云ふにまはしりて真物  
 ぢやない道在の道者達を化国といふは其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の

江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の  
 江戸の江戸をさすかゝるにまはしりて其の



自然と功者ある道行ナド 此れもいふ事なる  
 上はれお方さぬうにたのち方とて何者ぞいふ事  
 とありするいふしにのちもあはれぬかえのちをた  
 び今やとせ居る人のひたけのゆけはるまきまき  
 たることとてとせ居るの徳昌とて後とてまきすの  
 丈入たのては皆もの様をれも同の徳を徳者  
 のたびとていふたふえ切者なることなるはけは  
 用上はれお方さぬ方まきとていふ事なる  
 ナト小刀細工とていふ事なる 徳昌とて後とてまきす  
 うもいふ事なる 徳昌とて後とてまきす  
 乃免の擲ちやとていふ事なる 中の中なる事なる  
 一とていふ事なる 徳昌とて後とてまきす  
 ミヤとていふ事なる 中の中なる事なる  
 ナト小刀細工とていふ事なる 徳昌とて後とてまきす  
 うもいふ事なる 徳昌とて後とてまきす



花乃乃出揚と  
 又見物の執

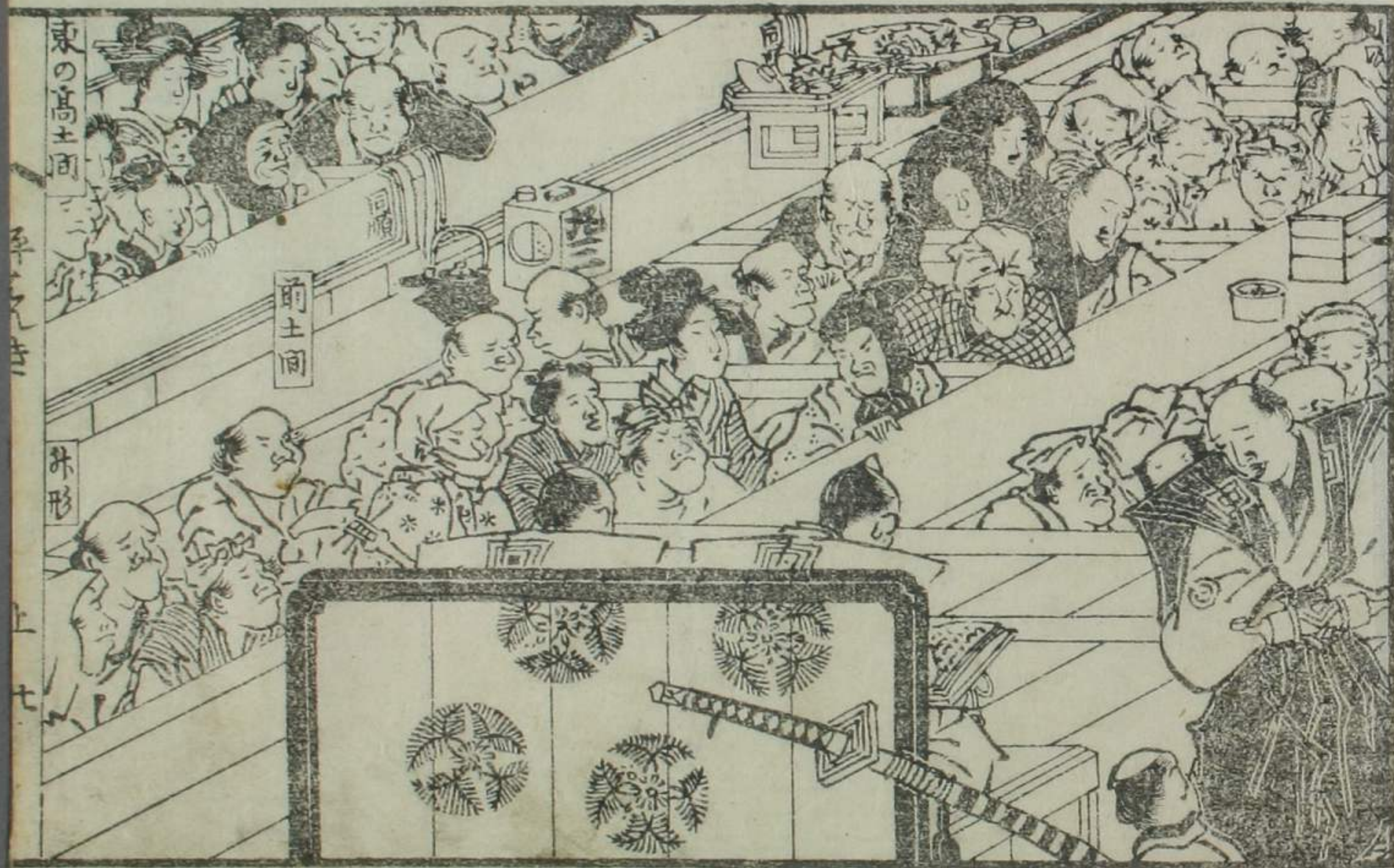
西の上様敷  
 太夫

益亭  
 二友

物の通花  
 花通の物

櫻若乃  
 袖

下の面





ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

ぬれ子場の  
式亭三馬

向棧敷



上棧

ぬれ子場の  
式亭三馬

下棧

ぬれ子場の  
式亭三馬



ちり塚の侍侍

高きうきうき

徳亭三孝

幕の内とちり

ちり塚の侍侍

茶室の侍侍

うきうき

ちり塚と

ちり塚

腹筋と

うきうき

高きうき

ちり塚と

ちり塚

おき

式亭三馬

進



四角

茶室の侍侍

平

中

江戸子の芝居好

三馬の芝居好

又ふん

丸二が

城長

よき

江戸

ちり塚

花の兒

各別

ちり塚

ちり塚

ちり塚

三馬



平

上  
七  
四

おぼき白 江戸  
「おぼき白」の恩あつたまはあつたせ

恩あつてト小声ナ又堺町の使がゆること何れ九

この衆知つすしくよく二間物の働けりのオホお教や

け琴を書齋かほひませせて下せ入トキニ二徳まん

三升とて女ら母社まきりいりト息まき食

されもて器利がまづ市川七代目トお徳をいひ顔

えせお暫の縁入のト新煮の菜はトお徳さりのい

だまのト花嫁かかめいりも暫とト罪

さくちやあひり市川の株トお徳の名物をい

のトお徳の縁入のト後者のト縁入ト自後縁居

が本後町でトお徳の縁入のトお徳の縁入

尻をトあつてトお徳の縁入のトお徳の縁入

うトいト今耳お徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

還トお徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

お徳の縁入のトお徳の縁入のトお徳の縁入

今も巻物の中へ奉返の馬馬が抱て居るナント  
 さきつゝの若ぢやあはれ入る果ての上方役者の  
 及ぶぬこさ夫おいらの癡呆な江戸産の女が  
 京打の簪をばし上の方風お髪を結たて  
 するいぢういふ不第う氣がきれ極入る身なれ  
 するいぢういふ不第う氣がきれ極入る身なれ  
 ちやあはれその境極つゝ江戸で波世のあまも  
 のり一人も極入る利属つゝ江戸子  
 くこときて波もきくまじいぢういふぢういふ  
 ぢやあはれ真れ江戸子とすのりせ居はえ  
 中うぢあねる。ハテ市川流の目ぢういふ江戸  
 のせ居の中ういふえる。コレは後者射の

二舟をいふせ入ハテせじが

江戸子ぢういふト

ちうのつま袖をひざの上へ  
 のせ入るあぢういふ

上方の芝居好

ちうのつま袖をひざの上へ  
 のせ入るあぢういふ  
 江戸子ぢういふト  
 二舟をいふせ入ハテせじが



新所れ縁ぢういふぢういふぢういふ  
 何波坐うゝまゝ五つ入る縁 三馬  
 右濱花五人男文士重俊



場ばがあるはついにあらうのちにあるはついにあらうのちにある  
 さしひの先せん録り約やく者しやがあるはついにあらうのちにある  
 物ものといふは一い年ねんはものたりつけしてはいふはあらうのちにある  
よからくはついにあらうのちにあるはついにあらうのちにある  
うまへては半はん年ねんといふはいふはあらうのちにある  
 直ちのないはらしやものいまの実じのいまの半はん年ねんといふ  
いふは掛か直ちといふは二に別べつにあらうのちにある  
こらいすは片ぺんとのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは株くわといふはあらうのちにあらうのちにあらう  
といふは今のちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは小このちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは後ごのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは後ごのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは後ごのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは後ごのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは後ごのちにあらうのちにある

弁べんもも居いるは上じやう方ほう者しやがあるはついにあらうのちにある  
 虚うそといふは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある  
あらうのちにあるは何なにといふはいふのちにあらうのちにある

年ねんのちにある  
 上じやう



172

客者译辨死卷之上甲

ひより <sup>つら</sup> 打 <sup>つら</sup> せう <sup>つら</sup> さいへ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> り

と <sup>つら</sup> け <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

は <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

上 <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

ら <sup>つら</sup> じ <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り <sup>つら</sup> へ <sup>つら</sup> ま <sup>つら</sup> り

